

文化学園大学

Bunka Gakuen University

文化服装学院

Bunka Fashion College

文化ファッション大学院大学

Bunka Fashion Graduate University

文化外国語専門学校

Bunka Institute of Language

Title	実践報告～職場や地域社会で求められる能力の向上を目指す：協働活動型授業の試み
Author(s)	吉本, 恵子
Citation	文化外国語専門学校紀要 23(2010-02) pp.67-85
Issue Date	2010-02-01
URL	http://hdl.handle.net/10457/971
Rights	

実践報告～職場や地域社会で求められる能力の向上を目指す

—協働活動型授業の試み—

国際通訳翻訳科 コースコーディネーター 吉本 恵子

(2009.9.1 受)

要 旨

本校国際通訳翻訳科は、母語と日本語を活かして通訳翻訳に関わる職業、または実際の生活に必要な能力の育成と向上を図ることを目的とした語学の専門課程であり、在籍する留学生の大半は卒業後、日本企業、日系企業への就職を希望している。留学生の就職をサポートするため、本科では「職場や地域社会で求められる能力」の向上をどのように授業に取り込んでいったらよいのかを検討する必要に迫られた。そこで4年前より将来日本で就職し、社会で共生するためのコミュニケーション能力を養うため、協働活動型授業を試みている。本研究では協働活動型授業が学習者にもたらす効果について事例に基づき考察していきたい。

＜キーワード＞ 協働活動型授業 グループワーク 社会人基礎力 体験学習

1. はじめに
2. 対象学習者
3. 協働活動型の授業とは
4. 協働活動型授業「テーマ研究」の実践
 - 4-1. 目標
 - 4-2. 授業の流れ
 - 4-3. 授業1 日本のベストセラー商品亀の子束子
 - 4-4. 授業2 ディベートで学ぶ日本のビジネス習慣1
 - 4-5. テーマ研究その他の授業
5. 協働活動型授業における学習者の変化

6. 協働活動型授業による教室構造の変化

7. まとめと今後の展望

7-1. まとめ

7-2. 今後の展望

参考文献

資料

1. はじめに

本校国際通訳翻訳科は、母語と日本語を活かして、職業または実際の生活に必要な能力の育成を図ることを目的とした語学の専門課程で、卒業時には専門士の資格が与えられる。母国あるいは日本で、大学、専門学校を卒業し、本科に入学した留学生の大半は卒業後、日本企業、日系企業への就職を希望している。

平成17年、経済産業省では「職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力」つまり「社会人基礎力」の養成の普及を企業、若者、学校などに示した。

ここ数年、留学生の就職は厳しさを増しているが、本科では毎年1年次の2月に進路指導室、教務課と協力・連携し「日本企業短期体験授業」を2週間実施している。この授業では実際に日本企業の現場で日本人社員と同じように仕事をし、留学生にとって馴染みのない日本企業を体験することを目的としている。この「日本企業短期体験授業」に備えて、科では「日本企業の職場などで求められる能力」をどのように授業に取り込んでいったらよいのか、を検討する必要性に迫られた。そこで4年前から、通訳翻訳の専門科目外の日本語ブラッシュアップ科目に将来日本で就職をし、社会で共生するためのコミュニケーション能力を養うためのグループワーク主体の授業「テーマ研究」を取り入れ、協働活動型の授業を試みている。

この授業には対象の留学生だけではなく、都内の5大学の日本語教育を専攻する大学生サポーター（教育実習生）、日本の企業6社に勤めるビジネスマン講師が適宜参加し、留学生を取り巻く緩やかなネットワーク作りを目指している。

これらの現状をふまえ、本研究では日本の職場や社会で共生するために求めら

れる能力の向上を目指した協働活動型授業が学習者にもたらす効果について事例に基づき考察していきたい。

2. 対象学習者

本研究の対象学生は2008年度国際通訳翻訳科1年生36名（日中通訳翻訳コース20名・日韓通訳翻訳コース16名）2009年度1年生32名（日中通訳翻訳コース20名・日韓通訳翻訳コース12名）で、学生の国籍は中国（香港含む）、台湾、カナダ、アメリカ、韓国である。68名の学生のうち、76%は母国であるいは日本で大学、短大、専門学校を卒業しており、全体の60%は仕事の経験がある。日本語能力はおおよそ「様々な分野の話題に対応でき、通常日本人が読んだり聞いたりすることが問題なく理解でき、自分自身の意見を述べることができる」レベルである。

3. 協働活動型の授業とは

本研究での協働活動型授業は体験学習の考え方を援用している。体験学習とは、アメリカのレヴィン(K. Lewin)のグループダイナミックス理論を起源とした“いまここ”の場で起こっている生の体験を素材に用いる教育方法である(荒木2003)。この体験をベースにした学習は、学習者自身が考え、体験し、結論を導き出すという学習者主体の教育方法で、「学び方を学ぶ学習」とも言われている(津山・山口1992)。

体験学習は一般的な知識の習得のための概念学習よりも、機能的な成果が高いという実証的研究もある(高1998)。

一方、社会人基礎力の中の対人関係力や問題解決力などは学生時代の課外活動経験(サークルやクラブ活動の経験)、達成感のある活動型の授業(ゼミなど)への積極的な参加などで習得している(2007 田中・高橋・三橋)という調査結果がある。

そこで今回の試みでは、前述の体験学習の手法を取り入れ、学習者自身が「日本企業の職場あるいは地域社会で求められる能力」とは何かを考え、グループワークで課題に取り組む中からそれぞれの問題点、課題を見つけ、グループとして課題を完成する、ということを目指とし、本校での協働活動型の授業とした。

4. 協働活動型授業「テーマ研究」の実践

4-1. 目標

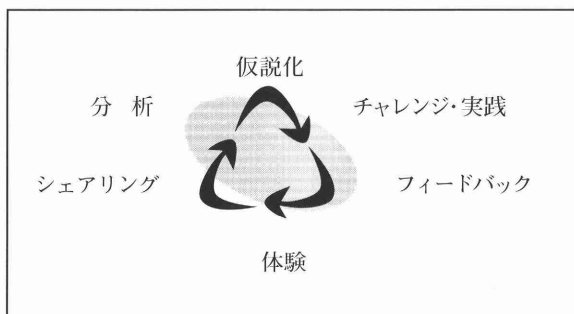
学習者自身が「日本企業の職場や地域社会で求められる能力」とは何かを考え、グループワーク・あるいは個人で課題に取り組む中からそれぞれの問題点、課題、能力向上のための目標を見つけることができるようにする。

4-2. 授業の流れ

1年次4月の第1回目の授業時に、中国、台湾、香港、韓国、アメリカ、カナダなど国籍にとらわれず、無作為に5、6名のグループを作り、各グループに大学生サポーター（教育実習生）1、2名を配置し、課題達成を目指した。グループのメンバーは半年間固定し、変更不可とした。1クラス30名前後の学習者に対し、2名の専任講師が「テーマ研究」を担当した。

授業では、1）資料をグループで読む（体験）、2）資料の中で何が起こったのかをグループの中で分かち合い発表する（シェアリング）、3）どのように起こったかを分析し問題点を探す（分析）、4）学んだことを自分の仮説を作り文章化、あるいはポスターを作る（仮説化）、5）仮説化したものをベースに新しいことを創造するため何かプランを立ててやってみる（チャレンジ・実践）、6）実践したことを振り返る（フィードバック）という体験学習のプロセスに沿った授業を行った。（図1）このプロセスを、課題を変え循環的に何度も繰り返し行った。

図1 授業の流れ



4-3. 授業1

以下に「テーマ研究」の授業の一部を紹介したい。「日本のベストセラー商品 亀の子束子」は10時間(50分×10)をかけて行うプロジェクト型の授業で、教室内外での活動と学校外の「亀の子束子西尾商店」工場見学・広報部でのプレゼンテーション・ディスカッションを組み合わせた授業で、3年前より年1回実施している。

テーマ : 日本のベストセラー商品 亀の子束子1

課題 : 日本のベストセラー商品亀の子束子について調べ、わかったことをシェアリングする

授業時間 : 3時間 (50分×3)

- 1) まず、グループで『亀の子束子』に関する資料3編を辞書を使わずに読む。資料から「亀の子束子西尾商店」についての情報を得る。意味のわからない言葉や表現は学生サポーターに聞いたり、役割を分担して、辞書で調べる。
- 2) グループで話し合い、文章の段落ごとに内容を表す小見出しをつける。
- 3) 資料を読んで、わかったこと、気づいたことをグループ内でシェアリングする。
- 4) ポストイットに今日新しく気づいたこと、問題点、感想などをそれぞれが簡潔にまとめて書き、提出する。

<学習者の感想>

- ・文章を読んで、見出しをつけるのが難しいと思った。その段落にぴったりのタイトルを考えなければならない、ただのまとめではなくて、内容が表せる見出しを考えるのが難しい。
- ・グループで見出しをひとつにまとめるのに時間がかかった。
- ・辞書を使わずに文章を読む練習がもっと必要だと思った。
- ・一人のアイデアでこんなに大きな企業になるとは、「亀の子束子物語」を読んで感動した。

テーマ：日本のベストセラー商品 亀の子束子2

課題：日本のベストセラー商品亀の子束子のユニークなキャッチコピーを考え、ポスターを作り、発表する

授業時間：3時間（50分×3）

- 1) 『亀の子束子』の新しいキャッチコピーを考え、ポスターを描く。
- 2) 完成したポスターを使ってプレゼンテーションをする。
- 3) それぞれのグループのプレゼンテーションについての質問をする。
- 4) ポストイットに今日新しく気づいたこと、問題点、感想などをそれぞれが簡潔にまとめて書き、提出する。

<学習者の感想>

- ・今回の発表はとても難しかった。商品のユニークな、みんなに覚えてもらえる名前を考えるのに時間がかかった。
- ・何回も授業をしていると、時間の管理が上手になると思う。今回は役割分担も時間の管理も前回よりよくできた。
- ・ポスター作りの役割分担もそれぞれ得意なことを活かしてできた。
- ・いくらいいアイデアで、いくら細かく話し合ったとしても、やはり何よりも時間を効率的に使うかを考え、決められている時間を考えながら意見交換する必要があると、また強く痛感した。

テーマ：日本のベストセラー商品 亀の子束子3

課題：『亀の子束子』の西尾商店を訪ね、束子作りを体験する。

営業部のスタッフと意見の交換をする

授業時間：3時間（50分×3）校外授業

- 1) 「亀の子束子西尾商店」を訪ね、亀の子束子の製造工程を実際に見学し、職人の指導により束子作りを体験する。
- 2) 営業部スタッフから会社の活動について説明を受ける。
- 3) 前回の授業で作ったポスターに基づきプレゼンテーションをする。

- 4) 営業部スタッフと意見の交換をする。
- 5) ポストイットに今日新しく気づいたこと、問題点、感想などをそれぞれが簡潔にまとめて書き、提出する。

<学習者の感想>

- ・文章で読んだ『亀の子束子』を実際に自分が作るという経験をし、イメージが現実になった。
- ・いろいろな商品のネーミングの由来と開発のプロセスがおもしろかった。会社のスタッフの名前が商品名になっていた。
- ・手作りの亀の子束子を見て、今まで考えていた束子のイメージが変わった。100年以上もベストセラー商品の束子を作り続けてがんばっている会社の精神を学びたい。
- ・自分で束子を作った。束子ひとつを完成させるのは簡単なことではない。スリランカの工場に熟練したスリランカ人の束子職人がいると聞き、驚いた。『亀の子束子』はグローバル企業だ。

テーマ：日本のベストセラー商品 亀の子束子4

課題：日本のベストセラー商品 亀の子束子についてフィードバックを行う

授業時間：1時間（50分×1）

- 1) 『亀の子束子1』『亀の子束子2』『亀の子束子3』の授業を通して、資料を読んでわかったこと、会社を見学し、束子の制作工程を体験して得たことを比較する。
- 2) 課題達成のために何が必要だったか、それぞれのメンバーがどんな活動をしたか、または何ができなかったかを振り返る。
- 3) クループ内でシェアリングする。
- 4) レポートをグループで作成し、提出する。
- 5) ポストイットに今日新しく気づいたこと、問題点、感想などをそれぞれが簡潔にまとめて書き、提出する。

<学習者の感想>

- ・この授業ではいろいろなことが経験できた。グループの中で自分の苦手・得意を意識して活動した。私の苦手な発表などは他のメンバーに任せ、自分は絵やポスターの係をした。少しでもグループに貢献できてよかったと思う。
- ・全員が意見を言って、それをまとめるのが難しい。消極的な人と一緒にするのは、時々疲れる。
- ・自分が理解したもので、何かを作り出す作業が楽しい。
- ・教室で学んだことを実際に工場に行ってみ学し、会社の人と話したりできるのが今までになかった経験だ。

4-4. 授業2

外部講師を招いての授業の一例を挙げたい。本科で招く講師は日本企業で働く現役のビジネスマンがほとんどで、日本企業の現状を学習者に直接語ると同時に、それぞれの専門を活かしたワークショップを実施している。下記はビジネスの現場で必要な論理的な討論についてディベートを通して学んだ授業の例である。

テーマ : ディベートで学ぶ日本のビジネス習慣1

課題 : B自動車会社広報部長の書いたビジネス習慣に関する文章3編を題材として選び、ディベートをする

授業時間 : 3時間 (50分×3)

- 1) まずディベートとは何か、ディベートの方法を学ぶ。
- 2) 身近な話題でグループ対抗のマイクロディベートを実施。
「中学校での英語の授業・教師は英語だけを使って教える」ことに賛成か反対か。
「小中学校への携帯電話の持込み禁止」に賛成か反対か。
- 3) マイクロディベートをした感想、改善点などをグループで検討。
- 4) 次週のテーマとなる文章を配布。
- 5) グループごとのテーマを決め「賛成」「反対」どちらを担当するか決める。
- 6) 来週、ディベートを行うための戦略をグループごとに立てる。
- 7) ポストイットに今日新しく気づいたこと、問題点、感想などをそれぞれが

簡潔にまとめて書き、提出する。

<学習者の感想>

- ・今回のディベートの練習を通してわかったのは、相手の立論をきちんと理解しないと、質問が作れないということだ。またテーマに対し、事前に十分な準備が必要だと思う。
- ・よかった点は「勝てる」ようにがんばったということだ。みんなで協力し、いろいろな意見を出した。準備が大切だと思った。
- ・相手の質問に論理的に反撃できなかったのはちょっと残念だが、相手の意見を聴きながら、自分の論点を整理して述べる必要がある。

テーマ：ディベートで学ぶ日本のビジネス習慣2

課題：B自動車会社広報部長の文章3編(1. 残業 2. 早朝出勤 3. 謝る)
を題材としてディベートをする。

題材について分析を加え、客観的・論理的にディベートを進め、相手チームに「勝つ」ことを目指す。

講師：B自動車会社広報部長

授業時間：3時間(50分×3)

- 1) 1時間目はすでにグループごとに進められていたディベートの戦略を確認する。
- 2) 2時間目は講師のB自動車会社広報部長ほか2名の教師をジャッジとして、2グループが「賛成」「反対」に分かれ、ディベートを開始する。
- 3) 勝ち・負けの判定をし、講師および担当教師が判定についてコメントする。
- 4) 講師から最後にコメントをもらう。
- 5) ポストイットに今日新しく気づいたこと、問題点、感想などをそれぞれが簡潔にまとめて書き、提出する。

<学習者の感想>

- ・今日のディベートのテーマ「早朝出勤」は実は私は賛成派だが、反対派とし

て資料を調べ、まとめた。反対派として意見をまとめることにより、別の面からテーマを考えることができた。

- ・私たちグループの意見は完璧だと思ったが負けてしまって少し悔しい。結果的には負けたが、一緒に準備してチームがひとつになったのは嬉しかった。
- ・今日の授業のためにがんばったのに負けてしまった。少し悔いが残るが、これから論理的に話す練習をしていこうと思う。
- ・私は反論の部分を担当した。相手のチームの意見を聞いて、その内容に反論しつつ、自分のグループの意見をまとめた。完全にはできなかったが、結果的には勝てたので、ほっとした。
- ・勝ちたいという気持ちで準備したのが、今日の結果につながった。

4-5. テーマ研究その他の授業

抜粋

	テーマ	内容
1	ライフキャリアを考える (50 分×3)	現在の留学生活を中心に今後のライフキャリアを考える。何に興味があり、今後どんな仕事に就いてみたいか自己分析をする
2	情報収集の技術 (50 分×3)	レポートを書くための情報収集の技術を学ぶ。また図書館の効果的な利用について、司書の方から説明を受ける
3	東京高等裁判所傍聴 ～司法通訳の現場 (50 分×3 教室活動) (50 分×3 裁判所傍聴)	司法通訳とは何か、を学ぶ。また実際に裁判所を傍聴し、司法通訳の現場を見学する
4	チームワークを考える 『サンプルカオス』の作成 (50 分×3)	チームワーク演習。指示通りにグループ内で役割分担をし、サンプルを組み立てる。完成したサンプルの完成度を評価する

5	外資系製薬会社人材開発部長によるワークショップ「キャリアのグッドスタートを切るために」(50分×3 教室活動)(50分×3 講師によるワークショップ)	製薬会社のMRという職業を取り上げ、MRに求められる能力から、自分自身の職業に対する考えを整理する。特にエンプロイアビリティ、コンピテンシーについて講師の準備したテキストに沿い、ディスカッションしながら自らのキャリアについて考察する
6	キャリアコンサルタントによる『キャリアシートの書き方と個別面接指導』(50分×3)	履歴書、キャリアシートの書き方の指導を受け、キャリアコンサルタントと個別面接を行い、アドバイスを受ける
7	コミュニケーションキャンプ準備 交流プログラムを立案する(50分×3)	学校行事、長野県で行われる「コミュニケーションキャンプ」において、地元の長野県立C高校との交流プログラムを考える
8	総合商社A役員による事例研究「あなたならどうする」(50分×3 教室活動)(50分×3 講師によるワークショップ)	仕事の現場で起こった10の事例について各グループで解決方法を考える。2回目の授業では講師を交え、各グループの答えを検討し、実際はどのように解決したかを講師より聞く
9	コンセンサス実習「9-3」誰を選ぶか(50分×3)	9人の中から様々な条件を分析しグループの全員一致で6名を選ぶコンセンサス実習
10	プロカメラマンによる写真を使ったプレゼンテーション(50分×3 教室活動・課外活動)(50分×3 講師によるワークショップ)	1回目の授業では講師の出した指示により、グループでテーマを決め、写真を撮る。2回目は講師を招き、写真とテーマについてのプレゼンテーションを行う。講師は最優秀とユニークな作品を選ぶ。

5. 協働活動型授業における学習者の変化

協働活動型の授業では毎回の授業後、学習者にポストイットを使って簡潔に当日の振り返りを記入してもらった。また前期、後期の授業の節目にアンケート調査を実施した。

ポストイットの振り返りでは学習者に以下のような変化が認められた。

1) グループワークについては「時間内にグループで資料を読むのが大変だった」「役割分担の重要性に気づいた」「チームワークというものは国籍に関係なく、何かを達成するために、誰でもチームワークを大切にしなければならない」などの記述が比較的多く見られた。一方で「グループでひとつの結論を出すのが難しい」「グループワークが好きではない人もいるので、グループをまとめるのが大変だ」などの問題点も提出された。

回を重ねるごとに、他者と自分自身のグループワークに対する関心の持ち方や取り組み方の相違、グループ内でのコンセンサスの取り方、自分の役割、リーダーシップの取り方、グループへの貢献など、活動から自分が感じたこと学んだことの振り返りが多様に見られるようになった。

2) 他にも「ディベートでは論理的に意見を言う訓練ができた」「実際に教室の中で勉強することも大切だが、学校外で何かを体験することから新しい発見があった」「普通は接点のない現役のビジネスマンの話を直に聞くことができた」「日本の企業の現場の話が新鮮だった」など、今までの学習とは異なる体験に興味を持った者もいた。

3) また授業を始めた当初、ポストイットの記録は短い文が多かったが、授業を進めるに従って記述が具体的で詳細になり、文章が長くなっていった。

2008年、2009年とも授業開始から6ヶ月を過ぎた9月に、経済産業省の『社会人基礎力』の「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の項目を用いてアンケート調査を実施した。(資料参照)

その結果、協働活動型の授業を通して1)「前に踏み出す力」(主体性・他人に働きかける力・実行力)は概ね良好、ほぼ力を発揮できたと答えた者が全体の73%を占めた。特に与えられた仕事(課題)に主体的に取り組めたか、役割を確実に実行できたか、という質問には、十分できた、と答えた者が多かった。

2) 「チームで働く力」(発信力・傾聴力・質問力・柔軟性・状況把握力・規律性・ストレスコントロール力) もほぼ力を発揮できたという者が全体の67%であった。しかし、その中で「自分の意見をわかりやすく聴き手を意識して伝えられたか」という発信力については「どちらともいえない」を選んだ学習者が58%おり、「日本語で自分の意見が相手にはっきりと伝わっているかどうか自信がない」という声も聞かれた。

3) 「考え抜く力」(課題発見力・計画力・創造力) がついたか、という質問に対しては、「どちらともいえない」と答えた者が全体の53%を占め、現状を分析し、目的や課題を明らかにしたり、授業の活動を通し、新しい価値やアイデアを生み出す創造力では、学習者自身が力を発揮できていないと感じていることがわかった。

6. 協働活動型授業による教室構造の変化

協働活動型授業には外部の講師、および日本語教育を専攻する大学生サポーター(教育実習生)が加わった。それにより従来教師と学習者だけだった教室構造に変化が生まれ、固定化していた教える者としての「教師」と学ぶ者としての「学習者」の関係や役割にも多様性が加わった。

たとえば、協働活動型授業の場合、大学生サポーターは学習者と同じ立場で授業に参加するが、時に外国人学生がこれまでの体験を通して教える立場に変わることもある。また外部講師からの講義やアドバイスは学習者と教室を運営する教師、大学生サポーターの三者に投げかけられていることもあった。1) 「同文化」対「異文化」、2) 「教師」対「大学生サポーター・学習者」の「異世代」、3) 「大学生サポーターと学習者」の「同世代」、4) 「大学生サポーター」を受け入れる「ホスト(教師・学習者)」と「ゲスト(サポーター)」の関係などが、授業をとって重層的に現れてきたように思う。(図2参照)

T = 教師 外部講師

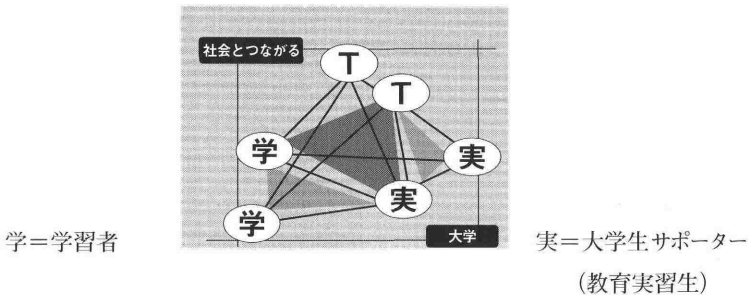


図2 協働活動型授業の重層的な広がり

7. まとめと今後の課題

7-1. まとめ

06年より開始した協働活動型の授業「テーマ研究」は在校生の就職を視野に入れ、試行錯誤を繰り返し、新しいプログラムの開発を行ってきた。特に今回の実践研究では、授業を通して「日本の職場や社会で共生するために求められる能力（社会人基礎力）の向上」を目指した。

実践研究を通して明らかになったことは、1) 学習者は概ね授業に主体的に参加し、わからないことがあれば周りのメンバーに働きかけたり、情報収集したりできること 2) 相手の意見を丁寧に聴く「傾聴力」は日本語を理解する上でも必要な能力と感じている学生が多いこと 3) 学習者が不安を感じているのは「課題発見力」や「計画力」などの社会人基礎力で言うところの「考え抜く力」であり、4) さらに「相手にわかりやすく日本語で説明する」日本語運用力に関わる「発信力」に不安を感じている学習者も少なくなかった。

最後に本実践研究の予期せぬ発見として、以下の2点をあげたい。

第1点は大学生サポーター（実習生）の持つ多様な役割が教室全体を活性化させ、グループワークを中心とした協働活動型授業に重層的な広がりが認められたことである。

大学生サポーターの授業日誌によれば、1) 学習者の誤用や日本語力の差への

対応など教える者としての意識、2) 授業担当教師から説明された授業の狙いに沿ってグループ活動をリードし、まとめようとする母語話者サポーターとしての意識、3) 活動についての関心の持ち方や取り組み方、内容に関する知識や経験などについて自分と学習者とを比較し、同世代の異文化の仲間として捉える意識、4) 活動から自分が感じたこと学んだことを振り返る学習者としての意識など、参加の回を重ねるごとに多様な位置取りが見られた (2009 吉本・石井)。

第2点として、外部講師の授業への関わり方の変化をあげたい。外部講師には1年に1回の授業を依頼しているが、最初、教室でのグループワークの授業や資料の作り方に不安を感じていた講師も、年数を重ねるごとに学習者の要望を取り入れ、テーマや授業の方法に工夫を加えている。授業終了後も学習者の質問には丁寧に回答しているケースが複数あり、就職に関する情報が提供されることも多々あった。

講師からは「若い人に自分自身の経験を伝えたい」「海外駐在しているときに現地で外国人からサポートされた経験があり、自分も何か留学生のためにできることをしたい」という意見が寄せられた。また、別の企業のビジネスマンを講師として紹介され、年々ネットワークが広がってきている。「自分自身も外国人学生から違った意見や考え方聞き、刺激を受けている」「学ぶことがいろいろある」など外部講師にとっても協働活動型の授業は互惠性のあるものとなっているようだ。

7-2. 今後の展望

今後の展望としては、1) 前述した「考え抜く力」の向上を目指した授業プログラムの開発を行う。2) 「日本企業の職場などで求められる能力」の向上を目的とした授業に引き続き工夫を加えていく。具体的には、日本企業に就職した卒業生を講師として招き、就職活動、日本企業での働き方など、ロールモデルとして学習者にアドバイスしてもらう機会を作りたい、と考えている。3) 協働活動型の授業開始以来、ビジネスマンの講師、大学生サポーター (実習生)、サポーターを送り出す大学関係者などと、緩やかなネットワークを築いてきたが、さらなるネットワークの広がりを進めていきたいとも考えている。また4) 学習者を指導する教員の研修も課題の一つである。現在ビジネス関連の授業を担当しているのは、商社、貿易会社、一般企業、現地日系企業でのビジネス経験を持つ教師

である。しかしそのような教師は限られており、今後のプログラムの発展を考えれば、ビジネス経験がなくとも関連授業をサポートする教師の研修は大きな課題となってくるだろう。

本校は語学の専門教育を行う専門学校であるが、今後も日本企業・日系企業への就職を目指す志望者の入学が続くと思われる。本校での学習が日本で就職を希望する学生の自己実現の一步であるということをふまえ、さらに現在のプログラムに改善を加え、充実した学生へのサポートを実施していきたいと願っている。

参考文献

- (1) 荒木正昭 (2003) 「高等教育における人間関係的訓練の導入と有効性の考察—グループダイナミックス理論に基づく教育実践の試み」 日本大学大学院総合社会情報研究化紀要 No.4
- (2) 高榎助 (1988) 「高等教育における人間関係技能の開発に関する研究」 鹿児島女子短期大学付属九州地域科学研究所報 5
- (3) 津村俊充・山口真人 (1992) 「人間関係トレーニング～私を育てる教育への人間学的アプローチ」
- (4) 田中潤・高橋浩・三橋明弘 (2008) 「学生が社会人基礎力を経験学習により向上させるプロセス」 日本キャリアデザイン学会第 5 回研究大会資料集 p68-71
- (5) 松尾睦 (2006) 「経験からの学習 プロフェッショナルへの成長プロセス」 同文館出版
- (6) 吉本恵子・大山シアノ (2006) 「わかる (理論) とできる (実践) を組み合わせた体験授業の試み」 (社) 日本語教育学会 web 版日本語教育実践研究フォーラム報告
<http://www.soc.nii.ac.jp/nkg/kenkyu/Forumhoukoku/yoshimoto.pdf>
- (7) 海外技術者研修協会 (2007) 「平成 18 年度経済産業省委託事業『日本企業における外国人留学生の就業促進に関する調査研究』報告書」
http://www.aots.or.jp/asia/r_info/index.html
- (8) 石井恵理子・吉本恵子・藤川美穂・谷啓子 (2008) 「多文化協働活動による学びを目指した日本語教育実習の試み」 第 2 回多文化協働実践研究全国フォーラム抄録 p28-31
- (9) 吉本恵子・石井恵理子 (2009) 「重層的な相互作用を生み出す多文化協働活動型日本語教育実習」 異文化間教育学会第 30 回大会発表抄録 p58-59

テーマ研究アンケート

テーマ研究の授業は(28日のワークショップが残っていますが)そろそろ終了です。最後に、この授業、あるいは他の授業を通して、あなたにはどのような変化が起きたでしょうか。

授業のアンケートにご協力ください。アンケートは授業を改善するために使います。みなさんの率直な意見を期待しています。どうぞよろしくお願いします。

1

1) 「主体性」

(グループワークやペアワークで)与えられた仕事に進んで(主体的に)取り組みましたか。

全く取り組みなかった 1・2・3・4・5 十分取り組めた

2) 「働きかけ力」

わからないことや困ったことがあったとき、周りのメンバーに自分から質問したり働きかけたりできましたか。

全くできなかった 1・2・3・4・5 十分できた

3) 「実行力」

与えられた役割を確実に実行できましたか

全くできなかった 1・2・3・4・5 十分できた

2

1) 「課題発見力」

現状を分析し目的や課題を明らかにする力がつきましたか

全くついていない 1・2・3・4・5 十分ついた

2) 「計画力」

与えられた課題の解決に向け、計画的に準備することができましたか

全くできなかった 1・2・3・4・5 十分できた

3) 「創造力」

授業での活動を通し、新しい価値やアイデアを生み出すことができましたか。

全くできなかった 1・2・3・4・5 十分できた

資料 「テーマ研究」 アンケート (2)

3

1) 「発信力」

相手の意見をわかりやすく聴き手を意識して伝えられましたか。

全くできなかった 1・2・3・4・5 十分できた

2) 「傾聴力」

相手の意見を丁寧に聴くことができましたか。

全くできなかった 1・2・3・4・5 十分できた

3) 「質問力」

相手の意見を聞き、質問したり、意見を述べたりすることができましたか。

全くできなかった 1・2・3・4・5 十分できた

4) 「柔軟性」

相手がたとえ違った意見を持っていたとしても、その立場を理解できましたか。

全くできなかった 1・2・3・4・5 十分できた

5) 「状況把握力」

周囲の人々や物事との関係性、場の雰囲気を理解する（空気を読む）ことが
できましたか。

全くできなかった 1・2・3・4・5 十分できた

6) 「規律性」

クラスやグループ内でルールや人との約束を守れましたか。

全くできなかった 1・2・3・4・5 十分できた

7) 「ストレスコントロール力」

ストレスが溜まったり問題を抱えたりしたとき、自分をコントロールする
ことができましたか。

全くできなかった 1・2・3・4・5 十分できた

■授業の内容について

1) 印象に残った授業はどんなテーマでしたか。1～3まで順番をつけてください

() 亀の子束子

() 製薬会社スタッフによる授業

() キャリアコンサルタントによる個別の面接

() 司法通訳・裁判傍聴

() サンプルカオスの作成

() その他

2) この授業には・・・大学・・・大学のサポーターが入りました。

サポーターの加わった授業について、あなたはどう思いましたか？

よかったところ、改善すべきことに分けて書いてください。

1 よかったところ

2 改善すべき点

3) テーマ研究でこんな授業をやってほしかった、という要望があれば書いてください。

4) その他、なんでも意見があれば書いてください